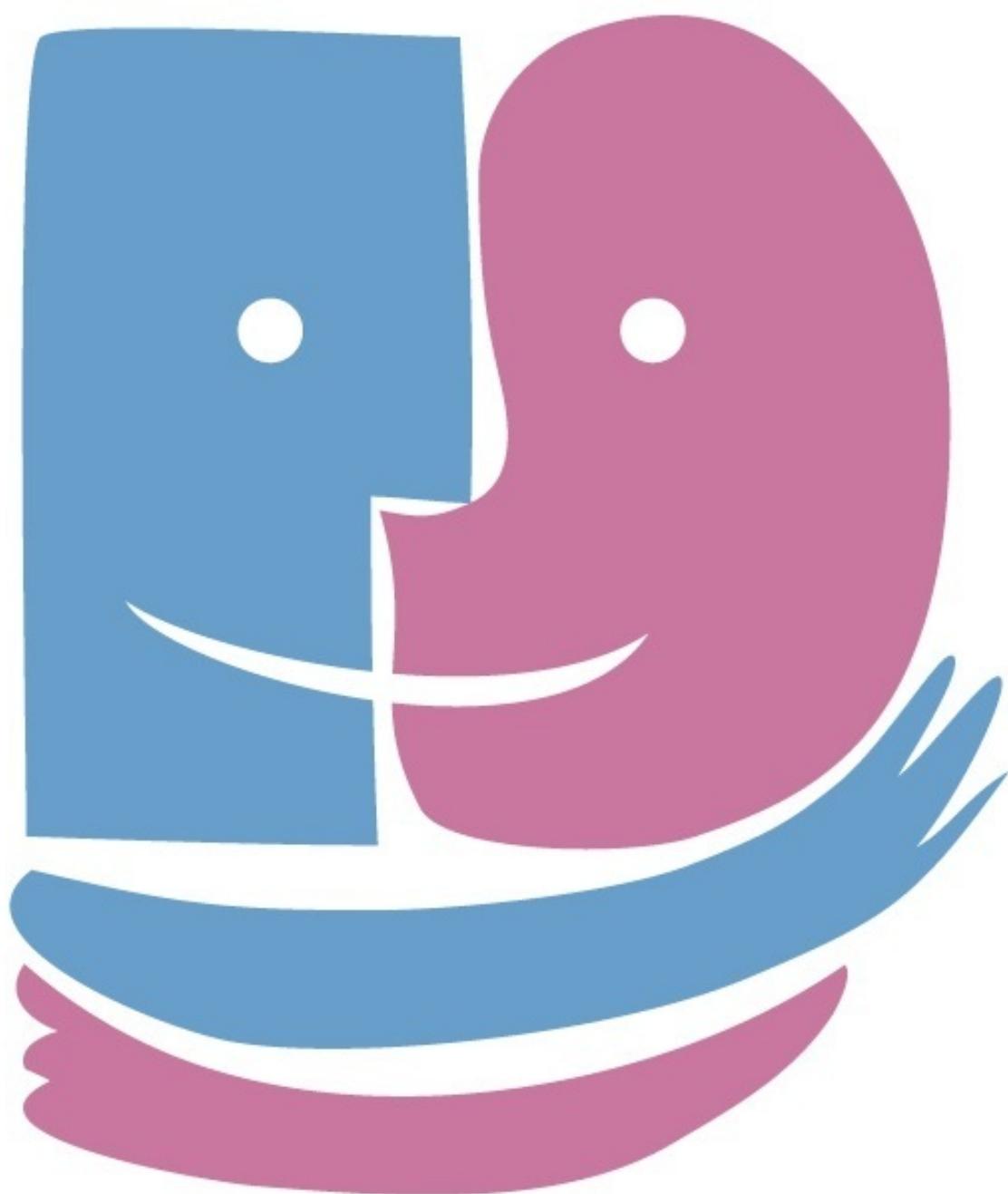


ブ ラ ン コ
BLANCO

私の半分 僕の半分



ふたりでひとりのBlanco

こんばんは～

ふたりでひとつのblancoです。

二人は似ているようで違います
性別も、年齢も、住んでいる場所も、
モチロン身体つき、顔も声もね！

でもね

二人は新しモノ好きで

そして何でも欲しがるトコが似ているのかもしれない。

(本当はさみしがり屋？八方美人八方ふさがり？)

そんな二人が又、今日から書き綴る

『BLANCO 2 私の半分 僕の半分～秋の章』

何時も手探りで

何時だって自由に～

そんな二人の作品は この先どうなるかなんて

今、これを読んでくれている あなたにはモチロン

そして私にも、彼にもワカラナイ・・・。

月もでてるようなので

さて開幕です

2011/09/06

ムーンライド

月明かりに乗ってでかけよう
どこに私を いざなうの？

雲の上の夜間飛行
音楽も不要さ

私の鼓動が音楽になるわ

急転直下
乱気流

君の鼓動は16ビート
しだいに大きくなっていく

そろそろ明かりを消さなくちゃ
さあ
ショーのはじまりだ

トップスピードでドライブ
トップギアでアライブ

君のハートを連れて行くよ

いつだって

全く・・・

君って人は

連絡もしないで

飛び出すなんてさ

だって・・・

転がり込んだ時も

そうだったじゃない

ああ

猫のような君よりも

君のような猫の方がマシかな？

ときどきそう思うんだ

あなたは

そんな気紛れな猫しか

愛せないくせに・・・。

弱気な日

そんなに強くないから
もうダメかも わたし

どうだろう？
あきらめた方が楽なのかな？

あきらめるのは嫌
一緒なら進めるかも・・・

いつだって僕は感じているよ
ともにいるこの瞬間を
離れていたって感じているよ

わたしは ぬくもりが欲しいの
身体ごと感じていたい
そばにいて欲しいの

ああ
君の手を借りて夜を抱こう
君の声を借りて夜を歌おう
月も羨むほどに

ああ・・・
別の男(ひと)に抱かれながら
あなたの声に酔いしれるは
月が狂おしく想うほどに・・・。

どうしても

君にどうしても
言わなきゃいけないコトがあるんだ
君にどうしても
ききたいコトがあるんだ

ヒミツはヒミツ
約束は約束
分かってはいるさ

でもね
僕はどうしても知りたいコトがあるんだ
たとえそのコトで傷ついたとしても
傷つけたとしても

ヒミツはヒミツ
約束は約束
分かっているのに抑えられない・・・

口にしたとたん
消え去る運命と知っているのに

やがて朝
新しい未来が平等に訪れる

見つけたもの

すべてが消えた・・・

その日
僕は見つけた

何を見つけたっていうの
何もないじゃない・・・

空白の先にあるもの

それは
いつだって未来さ。

Upstair

階段をひとつ上ろうと思う
見晴らしがすこしはマシになるように

上にあがっても
同じようなものだわ

同じように見えるモノ中に
新しい発見があるんだ

そうかしら
何も変わらないわ

うん
変わらないモノの中に真実があるんだ

でも・・・

ううん
駆け足でなら上がってみようかしら
リズムカルに

もうひとつ
もうひとつ上へ

顔のない夜

あなたとは違う声
そして指先・・・

君とは違う髪型
そして唇

別々の場所
別々の顔

流れてく雲をみながらか風にのせたコトバ
あなたには届かない・・・

わたしはこの指先の動きに酔う

交差する街の片隅でつぶやいたコトバ
君にとどくだろうか？

ふさいだ唇、別の女の温もり・・・

別々の時間
別々の声

届けられるものは少なすぎて
届けたい想いは多すぎて

七色のアーチ

カモメに恋した魚が
空に向かってジャンプ♪

蹴り上げたしぶきは
七色のアーチとなって
誘う
青い空
青い海
繋がってるんだキット
つづいているんだずっと

自分の影だと思ってた
いつもピッタリついてくる魚
カモメははじめて気がついた

七色のアーチを越えたら
君はまだそこにいてくれるだろうか？

青い月

青い月

すべては偶然？

大気のプリズム通り抜け

夜の大地に降り注ぐ

青い月

すべては必然？

水面の鏡に映る姿

すくう手の平こぼれ落ち

いつもは目に見えないモノが見えるとき

いつもは聴こえないモノが聴こえるとき

静かにコトバをすいこんで

青い月

青い月

すべては運命

奇妙に見えても

それは真実。

みつけたもの

やっと

みつけたの

まんまるお月さんから滑り落ちた

きいろいきいろい光る石

その石は月の涙？

それとも甘い飴玉かしら？

そっと口づけ確かめて

しょっぱいか 甘いか

手に転がして試して

ヒヤリと冷たい雫か礫か

ずんずんと深まる青の夜

シンシンと冷えいる空の下

あなたの手の中に光る明かりをたよりにして

やんわりとした浮かんだ想い

やっとみつけた

とっておきの気持ち

雨の後に

七色のしっぽ
キラキラ太陽浴びて光る

いつだって
雨の後にやってきて
僕らを驚かせようと企んでいるんだ

捕まえようとしたのよ私
でもしっぽしか手元に残らなかったの

彼は幻影
陽をまとい舞い降りては
君の心に話しかけるよ

それは何？
答えを教えて・・・

After Rain

それは
追い求める求める者だけに与えられる輝きさ

何時か追いつくからね

到底、あなたには追いつけないんだ私。

どんなに頑張っても

どんなに足掻いても・・・

でも絶対に諦めないよ私。

手繋いで

引っ張ってってもらってばかりじゃ終わらないよ

何時か追いついて

追い越すくらいの気力はあるんだからね

永遠の中の一秒

追いかけても追いかけても

永遠の中の一秒

知らぬ間に過ぎていく

風の日午後

風の日午後

街へ出た

公園の木漏れ日が揺れ

君はふりかえった

風の日公園

木々の匂い

何かを言おうとした唇

その言葉の意味

僕が見ていたもの

君が見つけたもの

答えなどないさ

問いかけは風に紛れて

インヴィテーション

ねえ僕ら きっとうまくいく
ねえ僕ら きっとうまくいくはず
たくさんの誘い
風の間と間に紛れ込んで
それほどイヤではないだろうか？
きっと僕ら
うまくいくはず

そうね私たち きっとうまくいく
そうね私たち きっとうまくいくわね
揺れ動く想い
雨の匂いにかき消され
あなたでないとダメだと感じた
きっと私たち
うまくいくわね

僕らの前に用意された無数の選択肢
空白のままの解答用紙
守られない期日
魅力的な誘惑に思いを馳せる夜
のぞきこむ闇をくぐりぬけたなら

きっと僕ら うまくいくはず

レイニーデイズバタフライ

青いバタフライ
風にヒラヒラ
雨の予感に追い立てられて

青いバタフライ
雨に打たれて
飛べなくなって
あなたの元へと落ちていく

雨の日のバタフライ
急ぎすぎてはいけない
雨の日のバタフライ
焦りすぎてはいけない

再び
飛び立てるように

青いバタフライ
風にフワフワ
花を探して舞い上がる

秋色のモード

ルネッサンス

秋色のモード

イニシャルを隠して

流行の兆し

インパクト

抽出された濃度

言い訳のコピー

明日への眼差し

ミュージアム

好きな絵画

素顔を見せて

静かなる時間

仮装パーティー

紅色に染まる

話しちゃいけない

今日を見つめる

覆い隠された秘密の定義を紐解いて

灰色に混ぜこんだ有彩色

黄緑色に憧れるまでギリギリのラインで

抑圧された情熱を昇華する

時の記憶

一秒前の記憶

一秒後の未来

思うまもなく過ぎていく

未来はそこにあって

過去はそこにあって

確かに過ぎていく時の中で

不確かな記憶と

不自然な想いだけを忘れたまま

生まれる前の記憶

体内に宿った瞬間に見た未来

今はここにあって

過去など何もない

確かに過ぎていく時の中で

遠い記憶と

遠い出逢いを忘れたまま

お揃い

色違いのレインコートと
お揃いの長靴はいて
雨模様の街に繰り出すの

わたしたち少しチグハグだけど
どこかではピッタリ合ってるみたいよ！
そう
ちょうど色違いのペアルックみたいに

相合傘は嫌いだけれど
それは君も同じ
手をつないだりはしないけれど
想いは同じ
歩いてきた距離は違っても
歩いて行く方向は同じ

ねえ
遠くから僕らを見れば
きっとみんな言うさ
ふたりはまったくもってお揃いだってね

Heartache

君を愛すと決めた時
差し出したはずの心臓の片割れが
空白の闇の向こう側で鼓動する

あなたに愛された瞬間に
受け取ろうとしたハートの半分が
明るい未来にドキドキしながら走りだした

昼と夜との境目で
深呼吸するシーツにくるまれたココロ
奪うのか？
愛でるのか？
最後のカードを切るまではあとわずか

ねえ

愛って何だろう？

ねえ

答え知ってる？

なら教えてよ

色もなくて

形もなくて

目に見えなくて

それでも確かにあるもの

雨の中でやんわり感じるもの

見ようとしても無理だけど

つかもうとしても無理だけど

確かに感じるもの

君を想うとき

君を見つめるとき

君にさよならって言うとき

ときどき ギュッ と感じるんだ

君も知ってるはずだろ？

花が咲くころに

蕾だった花が咲いたよ
綺麗に綺麗に咲いたよ

時を数えて
想いをこめて
ゆっくりと色をたくわえて

明るい色の花が咲いたよ
綺麗に綺麗に咲いたよ

僕らの約束
それほど遠い未来じゃない

何度目かの
夏が来て秋が来て
冬が過ぎ
また
風の光る季節に

蕾だった花が咲いたよ
綺麗に綺麗に咲いたよ

明るい色の花が咲いたよ
綺麗に綺麗に咲いたよ

還る場所

刺激的な誘惑に弱いよ私・・・。
でも あなたが何時だって1番だわ！
還る場所はココだと決めているもの

まだ、そんなことを言っているのかい？
還る場所なんか決めちゃダメさ
もっと先へ
もっともっとずっと良い場所へ
僕は行きたいんだ

君とね

ほんわかな まんまる

ほんわかな まんまるが
僕らのあいだに浮かんでる
抱きしめると小さくなって
離れるとふわ〜っと広がって

本当は ムギュッ！ てしたいのに
そうすると壊れそうで
優しく優しく抱きしめるの

まんまるなほんわかが
僕らのあいだで鼓動する
近づけば大きくなって
手を伸ばすと遠ざかり
毎日僕らのあいだを行き来する
不思議な不思議なほんわかと まんまる

手放すと もう二度と戻らない
大切な僕らのほんわかな まんまる。

大きな波に
さらわれそうだとわ私・・・
でも
それを望んでたのかも知れない

知らないうちに
なくしてしまったんだ
奪いとろうとしていたのに

寄せては返す波のように
少し心が揺れた私
なぜかしら解らない・・・

遠浅の海
歩いていけそうな夕焼け
見つめ合う距離
近づいているのか
離れていくのか
漕ぎ出した小舟は
水平線へと消えていく

正直な心臓

ポーカーフェイス

僕は憧れた

いつだってクール

バレやしないさ

でもね

君の前ではいつも

止まらないんだ

心臓はいつだって

ドキドキドキドキドキドキドキ

聴こえてやしないよね？

あなたのクールな魅力より

私は真実(ほんとう)のあなたが好きなの

いつだってクールな横顔

離れてたって感じる鼓動

そのドキドキにいつも反応する

私の波打つ早さの心臓

ドキドキドキドキドキドキドキ

ねえ聴こえてきたでしょう

二人の鼓動のハーモニー

ココロはいつしか不正直

騙すつもりが騙される

カラダはいつでも真正直

まっすぐに君を見つめる

ドキドキドキドキドキドキドキ

ドキドキドキドキドキドキドキ

重なりあう

カラダとココロがひとつになって

唄い出す

二人のハーモニー

過ぎて行く時間

チクタクチクタク

噛んだのウサギが
私の指をガブリ！って・・・
時間旅行に行けないわ

チクタクチクタク

影を追うのはおやめなさい
ふりむいたらお終い
タイムキーパーは不在だから

チクタクチクタク

影踏みしながら
少し遅れて行こうかな
急ぎ過ぎてた気がするの

チクタクチクタク

急いでいても
ゆっくりでも
時は等しく過ぎていく

君と深呼吸

深呼吸する空

コンニチワ

僕は元気

いっぱい吸い込んだ空気

コンニチワ

私もモチロン元気

深呼吸する空

甘い夢でできている雲

その下にいる私達

どうすることもできない問題はそのまま

ほうっておいたらいいさ

少し吸い込んで

少しはきだして

大きく吸い込んで

大きくはきだして

やがってすっかりと空っぽになるまで

深呼吸する空

コンニチワ

残されたセリフ

真実をひとつ置いていくよ
出かける前に
嘘をひとつ置いていくよ
君が出ていくその前に

真実なんてどこにもないわ
目に見えるものしか信じない
あなたがそう言ったのよ
暮らし始めたその朝に

だから言い訳なんてしない
真実か嘘か
あまり違いはないのだから
好きな方を選ぶように
君が
できるだけゆっくと悩めるように
真実をひとつ
嘘もひとつ
置いていくよ

光の射す方へ

輝く方へ歩いて行く
光の射す方へ進んでいく
小さく開けた窓の隙間から
のぞきこんだ世界
暗闇の僕ら
明るい方へ歩き出す

抜け出せないのに
それでも歩いて行く
手探りで
大地をしっかり蹴りながら
一歩ずつ確実に
明るい方へ歩き出す

重なり合う心臓

僕の心臓と君の心臓を重ねて
夜を刻もう
運命の時を迎えるまで あともう少し
できるだけ長くそうしているんだ

夏には少し早く 冬にはゆっくりと
刻むビートが揃うなら
朝の気配がする前に
どうにか夢の中に潜り込むんだ

私の心臓と あなたの心臓が重なって
熱い夜が更けていく
できるだけ長く甘い時間が続くように
息を殺して寄り添うの

夏には激しく 冬には凍えそうになるハートを
あなたは穏やかな音楽に似た言葉で癒す
このまま夢でも
熱い鼓動が重なり
今夜も素敵な音楽を奏でますように

季節の散歩道

秋の気配

首のあたりにまとわりつく

山でも行こうか？

君が言う

白雪が降る前に

秋の気配

身体をヴェールで包み込む

山に行きたいの

あなたと手を繋いで

彩りの世界がそこにあるから

落ちていく葉は

時を重ねた回廊

赤く染まる頬をかくして

ザクザクと踏みつけていく

秋の散歩道

ふたり

くぐりぬけたら

すこしずつあたたかになっていく

胸の奥が

やんわりと鼓動する

ぶっきらぼうな真実

君の答えを待ちながら
僕はいつの間にか眠りについた
「夢など見ない」そう言っていたのに
息苦しさに目をさました
それは残酷な物語かい？
真実を伝えるよりも
それは幸せな結末かい？
まるで映画のような

答えを考えてた
あなたにどう告げればいいのか
何時間も何日も・・・
モノクロームの夢しか見たことのない
あなたを想いながら
どうしたらいいのか
ずっとずっと・・・
そうして私は眠りについた
結末が書けない脚本家のように

真実はひとつというけれど
事実は変わらないというけれど
答えられない幾つかの問題を山積みにしたまま
ゆっくりと動き出した
時
あいも変わらず
向こう側の住人にヤキモキしているんだ

向こう側を気にするからいけないのよ
どうでもいいことだと言い聞かせて
放っておけばいいじゃない
問題なんて何時か解決するわ
答えがでるまで置いておくのよ
時
とまらないのよ

現実とはがむしゃらにやってくるもの

投げ出した足の下を

いつのまにか通過する

時

道道に置かれた幾つかの偶然を拾い上げながら

好むと好まざるにかかわらず

望むと望まざるにかかわらず

あいも変わらず

今日がやってくるんだ

残酷な . . .

残酷ね

歳月ってものは

奪っていくんだわ！

わたしのキラキラも自由な心も

そして身体さえも . . .

アンバランスなバランスで

反比例する毎日

着飾る術をみにつけたのは

覆い隠すためではなかったのに

好き好んで

化粧や衣類を身につけてやしないもの

ばかみたいだわ

そんなものに騙されて

踊らされているのよみんな

でもね

誰にも等しく時は訪れて

誰しも等しく見つけるんだ

ほら

憎ったらしいあんちきしょうも

愛しいあの人だって

いずれ同じこと

だから

胸にたったひとつ

大切な真実を隠して歩いていくんだ

この残酷な荒野を

点滅した時の中で

点滅する信号

飛びだした猫

ただひたすら前だけ見つめ

走る走る走る

点滅するサイン

計画か警告か

変わらない毎日を見つめ

走る走る走る

青から赤に変わる

もう戻れない

ただひたすら先を目指して

走る走る走る

今か先か

後か前か

代替えのないラインを越えて

すべり込んだスキマの高さを

気にすることもない

その瞬間

に

潜り込むために

走る走る走る

パンプキンの魔法

かぼちゃのプリンを作ったの
本当は馬車にしたかったけど
私の魅力という魔力は足りないみたいだから

それは期間限定かい？
あの意地悪な時の魔法はキライなんだ
走るのが苦手だね
甘い甘いかぼちゃのプリン
カラメルソースをたっぷりかけて
できるだけゆっくりと
「いただきます！」
魔法が永遠にとどきますように

そうよ！期間限定なの！！
グズグズしてたら逃しちゃう
ゆっくりしてたら食べられちゃう
走ってっても青くてかたい
かけ損なった魔法には
ほろ苦い
カラメルソースが似合いすぎちゃう

気をつけなさい 転ばぬように
お急ぎなさい 間に合うように
まもなく12時
真実の時が動き出す

穏やかで強い光に導かれし私

心無き者は
いつでも世界を壊そうとしている。
心無き者達が
今も世界を かすめとろうとしている。
スキをうかがい、闇に潜み。

心無き者は
僕らが つまづくのを待ちわびている。
それでも僕らは創りつづける。

そんな時私は立ちすくむ
とても強く
恐いものなど知らぬふりして生きてる癖に。
見せてはいけないスキと真の素顔。

心無き者が
私たちが つまづくのを待ちわびているのに怯えるの。
それでも私たちは創りつづける。

彼らがひとつ壊すたび、僕らはふたつ創り上げよう。
彼らがひとつ奪うたび 僕らはみつつ創りだそう。
壊されるよりもっと早く、もっと高く。

心無き者よ、
もう穢(けが)れ無き者を恐れるのはやめるがいい。
心無き者よ、
やがて自分自身をみつめる時が来る。

僕らが創り上げた世界を、心無き者よ、壊すがいい。
僕らは泣き、傷つき、悲しむ。
そして僕らは笑い、喜び、楽しむ。

そうしてこの世界は強く美しく輝くんだ。

幾重にも紡いだ想い

月の窓辺でダンス
君のために僕は歌うよ
月の明かりの下で、
もう少しだけそばにいて

月の下でダンス
君とふたりで、僕は踊るよ

月の明かりはスポットライト
あなたの歌声が私は好きなの
月がふたりを照らし続ける限り、
ちゃんとそばにいるわ

月の下で踊りましょう
あなたとふたりで、手を繋いで
君とふたり、息をあわせて

スタンド・バイ

ここにおいでよ
君のためにできることを探そう
ここへおいでよ
僕にだけできることを探そう
いつもというわけにはいかないけれど
一緒にいるさ
だから
そばにおいでよ

ええ、
すぐに行くわ
全速力で走ってくから待っていて
ちゃんとそこにいてね
すぐに ギュッ！と抱きしめてKISSして

夜明け前
君をつつむ闇のヴェールが
朱に染まるまで
抱きしめていよう

もう恐くなんてないわ
あなたの腕の中
私の心臓も白い肌も
なにもかも染めかえて

あなたに守られてる安心感

生きている手ごたえを感じる
ひとときの安らぎ・・・

ありがとうしか言えないけれど

気がついたら

甘えてばかりの私がいた

いつもいつも

あなたの時間を奪ってばかり

ごめんね

もう大丈夫だからキット・・・

少しは強くなれたと思うわ

あなたがそこにいてくれたから

優しさをありがとう

とても公平で平等なこの世界に

とても正確で残酷なこの世界に

ひとりぼっちじゃないって

教えてくれた君だから

目を閉じていても感じている

話さなくても信じている

「今」を歩いていける強さを

ありがとう

あなたの強さが私をつつみ

あなたの穏やかさが

私を笑顔にしてくれる

離れていても感じているの

話せなくても信じているわ

優しくなれる強さとあなたを

心の中で抱きしめて

私は今日も歩き続ける

ありがとう

ありがとう～

カラフルなモザイク

カラフルなモザイクを
夢の扉に貼り付けて
ポプラ並木に誘おう
石畳を敷き詰めて

色づくハートを
暖めあいながら
手を繋ぎ
ほほ笑みあって歩きましょう

赤に黄色に緑を贈ろう
青と紫と黒の代わりに
緑色の扉をぬけて
オレンジの窓枠をぬけて
春色の風が吹き抜けるまで
新しいページには
いつも
カラフルなモザイクを
貼りあわせて行こう

君とふたりで
あなたとふたりで

白い朝

壁に飾った一枚の絵
横に吊るされた白いドレス
待ってくれないまま時を刻む時計の音

日は落ち陽は昇り
葉は落ち花が咲き
カーテンとカーテンの間で揺れる世界
同じようできて
まるで違う毎日
いつかを待つのではなく
でかけよう
探しに
君にだけちょうどう明日を

身体にフィットする
似合いすぎるくらい純白の
スレンダーな白いドレス
でかけるのが遅すぎたのよ
揺れる世界の中
揺れる想いのまま
もうすぐ旅立たなきゃ
あなたから・・・。

本心

あなたがいないと私
多分 何もできないわ
そんな甘いセリフ
一度くらい言ってみたかったのよ

君がいないとダメなんだ
気がつきたくはなかったけれど
たぶん真実
一生言うことは無いけれど

でも心は正直ね
黙っていても見透かされているのよ
いつも物わかりがいい人ぶる
あなたに・・・
ずるいのよ二人とも
傷つけること恐れてるのかしら？
それとも自分自身が怯えてるのかも
恐がりなのよ私。意外と

意外？
でもないけどね

すました顔であなたは答えた
まるで心の奥底を見透かされているかのように

いつでも心のまんま中にあるとは限らない
本心
ときどきゆらいで
ときどき曇って
それでもきっと変わらない
本心

やがて夜が来る

ひとりでは淋しすぎるんだ

そんなたわいのない

本心

ときどき隠そうとしてしまうんだ

隠していても見透かされているくせに・・・

少しのずれ

今、言おうとしたコトは
今じゃなきゃダメなのよ
だからもう秘密にするね
とても大事なコトだけど
でも・・・
考えてみたらそんなコト
あなたにとっては どうでもいいコトなのよ
うっかり忘れるとこだったわ

僕が語るコトバは
複雑すぎるといふけれど
分かりにくいといふけれど
いつだって変わりはないさ
いつだって同じコト
でもね
水平線をはるか
眺めるとき
僕は永遠を求め
君は今を求める
たぶんそんなところなんだ

一瞬だけの永遠ほど
素晴らしいものはないのに
何故わからないのかしら
人の気持ちなんて移ろうものなのよ
たとえ今、この瞬間
わたしが あなたを愛していても
それは今の わたしの気持ちなのよ
それが永遠に繋がるなんて馬鹿げてる

ときどき近づいたり離れたりしながら
それでも決して交わることのない
川の対岸をゆく君と僕
進むべき先は同じなのに

望むべき未来は同じなのに
やがてすべてが混ぜこぜになるまで
ときどき近づいたり離れたりしながら
進んでいくんだ

そうね
おたがいを熱い視線で見つめながら
永遠に・・・

ある日のレイン

時折のレイン

ときどきのペイン

今日に限って傘を忘れた

降りしきるレイン

ときどきのペイン

私の傘だった人を失った

雨はいつでも突然に止んで

降りだしたタイミングなんて忘れてしまう

君はいつでも突然に走りだし

転んだ日のことは遙か

黒い雲の間から

突然 雨が降りそそぐ

金色の雨、激しい雨

私の濡れた肩を抱いて

何時もあたためてくれたのに

時折のレイン

ときどきのレイン

あの日

傘は飛んでいってしまったまま

夢の果て～(blanco編)

諦めて置き去りにした夢はね
いつまでも さ迷い続けて泣くんだよ
いつか迎えに来てくれるのかな？
もう、こないのかな？
忘れたの？
いつか僕を思い出すときがくるの？
って、
いつまでも泣き続けるんだ

さまよい歩いた足跡は
君をみつめる
二度と
君がふりかえらないコトを知りながら
ずっとずっと君の後ろから
君をみつめる

想いや夢をぜんぶ抱えたまま
歩いていくことはできないけれど
新しくはじめることはできる

あの日の君を
忘れたわけじゃない
忘れるはずはない

もう二度と君を泣かせたりしない
とは言えないけれど
迎えにいくさ
いつか
すっかりと僕が強くなったなら

秋色のじゅうたん

赤や黄色や茶色のじゅうたん
踏みしめたら
どんな音がするのかしら？

ザクザク？
サクサク？
少し乾いた美味しそうな音

ほんのり甘くて香ばしい
コーンフレークの音みたい
スプーンで混ぜるとザクザク！
そのまま口にほりこむとサクサク！

ミルクはいかが？
はちみつ混ぜて
ほんのり甘いハニーミルク

セピア色した景色を横目に
ふたりで並んで歩きましょう
甘い甘いくちづけを交わしながら
時々振り返りながら
色とりどりの落ち葉のじゅうたんを
しっかりと踏みしめながら

やがて冬
暖かさを胸に秘め
踏みしめられた大地のはるか
真っ白な絨毯の上を
踏み外さないように
明日に向かって
そう
二人の未来へと向かうように・・・

ゆきばのない影

追いかけていた影に追いかけて
寝転んだ空を見上げた

思ったより青くないや
それは今日なのかなあ

見知らぬ影が追ってくる
覗きこんだ海を眺めた

思っていた以上に青かった
それは昨日のことだったかしら

壁にもたれかかると
行き場を無くした影が覗き込む

立ち止まっているだけかい？
逃げ出してしまったのかい？

追いかけてくるわ！
のみ込もうとしてるのよ！
あの影はわたしを・・・
そう、とって代わろうとしてるんだわ

気がつけば影はわたしとなり
私はわたしに代わってほほ笑んでいた
影の真似をすることしかできない・・・
そのわたしを見て、影はほくそ笑んだ

あらかじめ開かれた扉
窓はあけておこう
君が迷わぬように
つぎの扉が開かれるまで
扉も開けたままにしておこう
もどれない
いつかへの想いを
すこしだけ残して

ありがとう嬉しいわ
何時でも逢いにきてもいいのね
迷った時に不意に差し出された手が
あまりにも温かったから私・・・

少しずつ、少しずつ
葬った想いをここに還しに来るわ
このままだと
やがて壊れてしまうわ私・・・

いつだって、つらくたって、傷ついたらって
扉を閉ざさない君
だからきっと
いつだって
扉は閉ざされないまま
道は続いているんだ
道は続いていくんだ

迷っても、困っても、弱っても、うつむいてみても
やがてつぎの扉が開く

君と半分こ

朝の陽射しも半分こ！

君とふたりならんで目を覚ました朝は

寂しい気持ちも半分こ！

でも 楽しい思い出はバイのバイのバイ！

夜の悪夢を抱え込み

泣きぬれた日もあるけれど

あなたとふたりで半分こ！

許されるのなら半分こ！

月明りなき世界では

常に笑顔の寂しさを

あなたが理解できるなら

苦しさまでも半分こ！

感謝の気持ちは倍にして？

いや

計り知れぬと感謝して

燃える想いはバイのバイのバイ！

ありがとうのつづきのうた

ぜんぶうまくできなくたっていいよ
あのね悲しみは果てしなく
今日は負けてしまうかもしれないけど
明日はほらやって来る

どんな小さな思いひとつも
みんな今につづいているから
あきらめないでいてくれた君に
ありがとうのつづきの歌

ひとりひとりの笑顔あつめて
ひとつひとつつなぎあわせて
ひとりぼっちじゃないって
教えてくれた君に
ありがとうのつづきの歌

ゆこう世界は僕らのもの
だから明日の話をしよう
まだ見果てない未来へ向かっていく君に
ありがとうのつづきの歌

春をつげる鳥が今
北へと飛びたっていく
桜咲く季節がまたこの街へやってくる
何を求めることもなく
何を伝えるでもない
世界は静かに回りつづけている
言葉には言葉で
想いには想いで
歌にあわせて
笑顔のまんまで
伝わる気持ちあつめて
つながる思いこめて
世界をつなごう

その先には
花

答えなんて知らない

なぜだろう？ココロが揺れるのは
なぜだろう？ココロが震えるのは
何もない空間に 何もなかったはずの昨日 君と僕は出逢った
なぜだろう？ココロがしめつけられるのは
あの時出会わなければ 話しかけなければ 何もなかったはずの今日
存在しなかったはずのココロが揺れる

偶然という必然にココロが導かれたから
タイミングという神様の悪戯にココロが震えたから
何もない空間に 何もなかったはずの昨日 あなたとワタシは出逢った
なぜだろう？ココロがしめつけられるのは
そんなことを考えるのは もうよしましょう
あの時出会わなければ 話しかけなければ 何もなかったはずの今日
存在しなかったはずのココロが揺れる
感じあい 見つめ合いココロのおもむくまま
このまま ゆけるところまで進んでみよう
ふたりで・・・。

ご機嫌／(ななめ)

気紛れニャンコはご機嫌／(ななめ)

自慢のおヒゲもやっぱり／(ななめ)

びっくり仰天しただけだけど

ちょっとイタズラしただけだけど

イライラ ムカムカ 収まらないや

おめめは△(さんかく)

うなり声

手をだしゃきっとケガするよん

気紛れニャンコはご機嫌／(ななめ)

自慢のおヒゲもやっぱり／(ななめ)

タイミング

可笑しいわね♪

何だかタイミングが一緒みたい
そんな小さなコトが嬉しいの
子供じみているけれど

ほら

今君は微笑んだよね
昨夜の話を思い出して
僕もそうさ
なんてことない可笑しな話
呼吸も鼓動もあわせるのかな？

なら

あわせてみましょうか？
今度月が半分になる夜に
確かめるように・・・

いいや

やめておくよ
光と闇に裂かれるようなことは

合わさるならば

満月の夜に

癖

もう、独りでは何もできないみたい
あなたがいなければダメなの
真夜中になるとそう思うのは悪い癖

夜は悪戯が好き
君の心に忍び込んで
遠い記憶をもてあそぶ

受話器の向こう側の声
ディスプレイの向こうの言葉
思い出そうとしても無駄さ
囚われた闇の中で
いつだって
独りを感じるだけなんだ

ほんとうは いつだって孤独なの
あなたの肉体が手の届かない
彼方に消えてから・・・

震える指先につたう汗
波打つ胸の鼓動の高鳴り
ぜんぶあなたのもものだったのに
今はただ鏡の奥
私の傍らにぽっかりあいた空間を覗きこみ
真夜中すぎて
ひとりではできないモーション
思い出すだけ

時間旅行

僕らの乗り込んだ列車は
音もなく進み続ける
君を乗せ
僕を乗せ
停車駅がほんの少し
経由地がほんの少し
時刻表がほんの少し
違うだけ

隣の指定席予約したはずなのに
一つ席がずれてたみたい
あなたを乗せ
私を乗せ
私は行き先が決められ
あなたは急ぐ旅でなく
目的がほんの少し
違うだけ

二人を繋ぐ時間
二人を繋ぐ心に乗せた
時間旅行の列車は走る

二人で過ごすこの旅は
いったいいつまで続けられるのだろう

もどることはできないのだから
ふりかえることはできないのだから
この期限の書かれていないパスポートで
どこまでもどこまでも走ってくんだ
やがて
終着駅へたどりつくまで

Blanco 2 私の半分 僕の半分

<http://p.booklog.jp/book/33457>

著者 : blanco

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/blanco/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33457>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33457>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.